

『東方』二七六号より

中国二〇世紀

文学研究への多彩な視角

近藤 龍哉（日本女子大学）

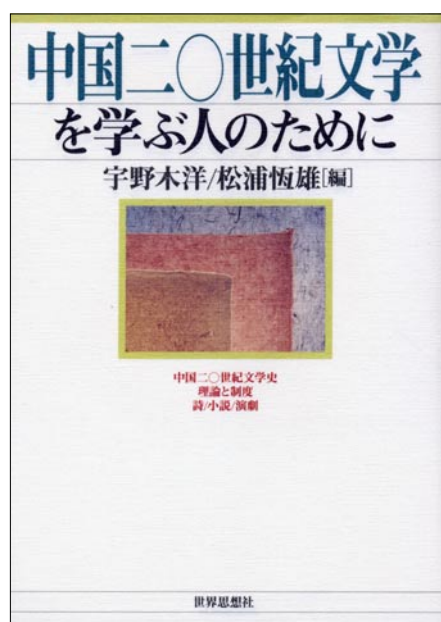
中国の近現代文学の魅力はいったいどこにあるのか。一世紀の歴史を有するその領域はどのように広がり、どのような豊かさを持っているのか。それはどのようにして生まれ、どのように展開し、今、どのような様相を示しているのか。現在、その研究に取り組んでいる人たちは何を問題にしているのか。このような盛りだくさんの目的を一冊に込めるために知恵をしばってなされた共同作業の結果がここにある。

本書は、書名に「〇〇を学ぶ人のために」を掲げるシリーズの一冊で、入門者への指南書を目指したと思われるが、内容はむしろこの分野の研究者にむけた刺激に富む問題提起の書となっている。執筆者は、いずれも「中国文学研究会」のメンバーである。こうした共同作業としては、すでに同会編の『原典で読む 図説 中国二〇世紀文学 解説と資料』（一九九五年、白帝社）があり、代表的作品の原文に触れながら全体を俯瞰できるという工夫をこらしたテキストとなっている。本書も文学史的に俯瞰しようという問題意識を引き継いでいるが、さすがにこの間約十年の執筆者たちの問題意識は多様に深化しており、二〇世紀の中国の文学実践をとらえ直すとする執筆者たちの意気込みが感じられる。より広い範囲の読者に読んで欲しい一冊である。

中国の近現代文学史の執筆は、中華人民共和国成立後、

宇野木洋・松浦恆雄編

『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』
四六判・三六〇頁・世界思想社・二、六〇〇円



大学の授業に「中国新文学史」が設置されたことにより始まった。そのため時期区分や取り上げる対象、またその評価についてなど、規範性の強いものとして存在してきた。

だから、八〇年代以降、中国の知識界で「反思」が進むなか、過去の文学史の枠組みを打ち破ろうとする動きが活発になった。革命史と重なっていた時代区分の見直しをはじめとして、無視ないし否定されてきた作家や流派及びジャンルの見直しなどが進み、文学史の書き換えという問題意識も高まった。八五年に黄子平・陳平原・錢理群によって提案された「二〇世紀中国文学」の概念も、前世紀末に始まる世界文学への編入過程としてとらえようという、新たな試みの代表的な一つであった。本書の表題の「中国二〇世紀文学」というくくりも、中国の研究の新しい動向を踏まえたものである。

▼ 『東方』276号より

一 中国二〇世紀文学研究への多彩な視角

▲ 近藤 龍哉

日本を含め、この二十年間に中国近現代文学研究は多様に深化した。未開拓だった研究領域が次々に発見乃至は拡大されていった。それとともに、文学研究の意味が見直され、新たな研究方法も次々に採用された。そればかりか、現実の中国の文学実践それ自体も変化し、その主たる担い手であった知識人の自己認識も大きく変化しつつある。このことから、旧来の文学史の叙述方法の無力化が認識されつつある。

本書は、これらの変化に対応して、その課題に応えるために、新しい叙述の方法を試みたものといえる。
 目次と執筆者は次の通りである。

まえがき	宇野木洋
【パート1】	
コンパクト・中国二〇世紀文学史	宇野木洋
【パート2】	
二〇世紀前半の理論と制度	
制度としての近現代文学	絹川浩敏
二〇世紀後半の理論と制度	
「統治」の枠組から文化「解説」へ向けた模索の営為へ ——対抗軸としての政治・欧米理論・コマーシャルリズム	宇野木洋
二〇世紀前半の詩	
現代詩の生成——詩律の変遷とモダニズム	是永駿
二〇世紀後半の詩	
詩の復権——中国現代詩の沃野	是永駿
二〇世紀前半の小説	
「救国」と「通俗」の相克	坂口直樹
二〇世紀後半の小説	

トップページにもどる

「書く」ことの意味——二〇世紀後半の中国小説

今泉秀人

二〇世紀の演劇

二〇世紀の京劇と梅蘭芳

松浦恆雄

【パート3】

古典から二〇世紀へ——詩文

寛文生

上海の「京劇」

藤野真子

日本占領下の文学状況——「満洲国」の文学研究

岡田英樹

日本占領下の文学状況——上海

梁有紀

「中国二〇世紀文学」にとって「台湾の文学」とは

星名宏修

エミгранト文学

是永駿

VCDによる中国映画分析の新たな可能性

好並晶

あとがき

松浦恆雄

読書案内

年表

鈴木康子

索引

執筆者紹介

「パート1」では、ウェスタン・インパクトから現在まで、政治的基準による時期区分をとらず、一世紀を四半世紀ごとに区切って、簡潔に通観する。全体は通説を踏まえた周到な叙述ながら、第四四半世紀の部分は、欧米文学理論の受容と変容や「文芸の市場化」による文学界の活性化と「純文学の危機」など、複雑な今日の問題を的確に示し、従来特殊なものと考えられてきた中国文学の、グローバルゼーションへ向けての第一歩であることを示してくれる。

「パート2」は本書の特色のもつとも現れているところで、「理論と制度」「詩」「小説」「演劇」の各分野ごとに、二〇世紀を前半と後半とに分け（演劇は分期せず）、それぞれの時期を貫く特徴を、執筆者独自の研究視角を通して、つまり、各執筆者が、その時期その領域が直面し内包せざるを得なかったと認識する問題を中心に叙述するのである。いずれも研究視角が際立った論文となっていて、読みごたえがあり大いに刺激される。

「制度としての近現代文学」は、二〇世紀前半に近現代文学が成立していく過程を、主にそれを成り立たせる条件の整備に注目し、出版史の研究など最新の研究を踏まえて跡付ける。科挙の廃止、資本主義経済とジャーナリズムの発展、それによる知識人の立脚点の変化、国語運動の発展、それらを押さえた上で、教科書から出版した出版社が雑誌の発行に力を得、さらに文学雑誌の発行に力を注いでいく過程と、その中での出版側と作家の力関係の変化や出版側自体の変化を跡付け、一九三〇年代半ばには、「近代的な制度として、ビジネスとして自立可能な文学」が生み出されるまでに至った、とする。従来、啓蒙運動を中心に論じられてきた部分だけに新鮮な切り口といえる。「制度としての近現代文学」という用語は、今後定着するだろうか。

『統治』の枠組から文化『解説』へ向けた模索の営為へは、毛沢東の「文芸講話」が統治の枠組みとして強力に働いた時期、文革後の「文学観念」変革の時期、「六四・天安門事件」後の「文学商品化」と呼ばれる現象が起こり文学理論が周辺化していく時期の三時期に分け、それぞれの時期における「文学の対抗軸」を鮮明にし、それをめぐる文学理論の様相を解説する。「対抗軸」が示されることによって、時期ごとに文学理論のもつ意味あるいは位置が大

トップページにもどる

きく変わる様子があざやかに浮かびあがる。

「現代詩の生成」は、古典詩から新体詩への転換、自由詩の詩律と現代格律詩について、三〇年代から四〇年代のモダニズム詩の受容について述べる。「詩の復権」は、雑誌『今天』の詩人を取りあげ、文革中に育まれた「清新な感性」と強靱な精神を持つ詩人たちによる詩の復権を告げる。さらに大陸が言論統治の抑圧下にあったとき目覚しい発展をとげた台湾の詩と、「六四」以後海外に出た詩人（エミグラント）と大陸で模索を続ける詩人を、二〇世紀文学に普遍的な命題である現代性（モダニティ）という視角で展望する。執筆者の確固とした詩観に基づいた取捨が明確に示されている。

「救国」と「通俗」の相克」は、魯迅の「狂人日記」から李広田の「引力」までの八篇の小説を紹介分析する。「啓蒙」と「救国」の二重変奏の説を下敷きに、「通俗」あるいは「通俗性」という点を意識して、「新文学」から三〇年代長編小説、抗戦期の小説までを概観する新しい試みである。「通俗小説」の再評価や現在の「文芸の市場経済化」を踏まえて、新たな視角を導入したといえよう。執筆者の主張が十分な説得力を持って展開されているとまではいえないが、雅と俗、西と中を座標軸に、「新文学」の基本構造を論じる尾崎文昭の説（「中国近現代文学の基本構造とその終焉についての試論」『アジア学の将来像』二〇〇三年、東京大学出版会）などと問題意識において通底するところがあり、今後の議論が楽しみである。

『書く』ことの意味」は、阿城、洪然、鄭義、汪曾祺、沈從文を取り上げ、二〇世紀中国の作家にとって「書く」ことがどんな意味をもつのか問題にする。「孩子王」の少年（王福）の作文を、「言葉」を持たぬ存在である父親の「代

弁」とし、「書く」という行為とそれによって描かれた対象との間にあるきわめて幸福な関係性を示し、それと対照的な「不幸な代弁人」としての知識人を指定する。洪然、鄭義を、それぞれ「農民の代弁者」、「歴史の代弁者」と分析しながら、「書く」という行為に対する態度にある共通性をも見逃さない。汪曾祺の小説観、沈從文の「書かないことの意味」を含め、執筆者の思索について引き込まれる。

「二〇世紀の京劇と梅蘭芳」は、梅蘭芳がなぜ絶大な影響力を持ちうる役者になりえたのか、その理由を明らかにしていくことを通して二〇世紀の中国演劇の特徴を明らかにしようという意欲作である。女性の社会的進出を京劇の発展史の中に位置づけた部分、梅蘭芳の成功の理由を位置づけた部分、代表作「貴妃醉酒」について、梅蘭芳の楊貴妃像の変遷を通して民国初期から建国後に至る京劇界の意識の変化がたどられる部分は、分析が具体的に極めて説得的である。五四知識人の伝統文化への態度や権力の演劇利用の問題などにも目が配られ、本書の狙いが十分に生かされた大作である。

すでに紙幅も尽きてしまい、詳しくは紹介できないが、「パート3」では、目次にあるように、新たに開拓された研究領域や欠落していた研究領域について、パイオニア的役割を果たしてきた執筆者たちの啓発的文章が並ぶ。「日本占領下の文学状況」などは、すでにすぐれた成果が上がつており、「パート2」に一分野として柱が立てられてしかるべきとも思われる。いずれもこれまでの研究からさらに視野を広げることの提起となっていて、こうした呼びかけに応えていつそうの関心が高まることを期待したい。なお、関連事項を網羅した詳細な年表（一七一―二〇〇〇）と索引、読書案内が付いていてたいへん親切な構成と

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる

なっていることを付け加えておく。

以上、広がる研究領域と多様化する研究方法への積極的対応と意欲的取り組みに大いに敬服した点を述べてきた。最後に一つ、こうした新しい取り組みと裏腹の関係として必然的に生じることかもしれないが、中国の現代文学が戦後の日本の読者を引き付けてきた魅力の中心とも言えるべきものが、あまりにも後景に退けられているような気がする。この点に物足りなさを感じるのは、私の「落后」のせいだろうか。